

総務省統計局のデータによると、書籍新刊点数の推移は、2013年の8万2589点をピークに、2021年には6万9052点と減少傾向にあります。スマートフォンの普及によって動画を閲覧する人が増えていること等、様々な要因が挙げられるでしょう。

一方、電子出版の市場規模は右肩上がり成長しており、媒体の違いはあるものの、本は私たちの生活を豊かにしてくれる身近な存在であることに変わりはありません。

書籍新刊点数は減少傾向にあるとはいえ、毎年多くの本が出版されており、その中で何を讀んだら良いのか迷ってしまうこともあるでしょう。

インターネット上で本を検索し注文できる便利な時代ですが、実際に書店に足を運び、本を手にとってみて、「読んでみたい」(なぜか気になる)といった自分の感覚を頼りに本を選んでみてはいかがでしょうか。「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を遺したといわれる、物理学者で随筆家の寺田寅彦氏は次のように述べています。

「ある天才生物学者があった。山を歩いて滑ってころんで尻餅をついた拍子に、一握の草をつかんだと思ったら、その草はいまだかつて知られざる新種であった。そういう事がたびたびあったというのである。

読書の上手な人にもどうもこれに類した不思議なことがありそうに思われる。のんきに書店の棚を見てあるくうちに時々気まぐ

自分の感覚を大切にして 本との出合いを楽しむ



れに手を延して引っぱりだす書物が偶然にもその人にとって最も必要な本であるというようなことになるのではないか」

(『読書と人生』)

このような本との巡り合わせは、実際に書店や図書館に足を運ぶことによって生まれるのではないのでしょうか。

インターネット上のブログ等で紹介されている本や、大きな賞を受賞した話題の本を讀んでみると、「期待していたものとは違った」という経験は、読書に親しんでいる人であれば一度はあるでしょう。

また、ある時に讀んでよく分からなかった本でも、久方ぶりに讀んでみると興味深く読めた、ということもあるものです。

前述の寺田氏は「ある本を讀んで興味を刺戟されるのは何かしらそうなるべき必要理由が自分の意識の水平面以下に潜在している証拠だと思われる」と述べています。

これまで蓄積された経験や、その時々々の心境等が基となり、今の自分にとって必要な本との出合いが生まれるのでしよう。

インターネット上の情報だけでなく、書店や図書館に足を運び、書棚を見渡し本を手にしてみる、といった探索によって自分の感覚が呼応するのではないのでしょうか。

慌ただしい毎日を送っていると心にも余裕がなくなってしまう。だからこそ、書店や図書館に足を運ぶ時間を設け、自分の感覚を頼りに本を探し、日々の生活を充実させていきたいものです。